

わが国の大学博物館の閉鎖性

—東京大学理学部博物館を事例として—

守重 信郎

日本大学大学院総合社会情報研究科

The closing Character of a Japanese University Museum

—a Case Study of the Scientific Museum, Department of Science, the University of Tokyo—

MORISHIGE Noburo

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

In this study, the author discusses how the attitude of emphasizing the academic use of university museums secludes the museums in Japan, while focusing on the case of activities of the museum of School of Science, the University of Tokyo, which is the first university museum in Japan. This museum was planned by Professor Morse, as a comprehensive museum open to society. However, this museum, which was opened after Professor Morse returned to his country, was reluctant to allow general visitors to enter. This attitude became stronger year by year, and only the researchers who received prior permissions could enter the museum. Then, as university buildings were relocated, the items in the museum were distributed to each department, and the museum was closed. The primary reason why this museum was reluctant to allow off-campus people to enter is that this museum was considered to be the one for the people inside the university and researchers only from the time of establishment. The emphasis on academic use hindered public opening and intensified its reclusive character. The mindset that “university museums are the facilities for academic use” has existed since the period of the first university museum in Japan, and this mindset secludes university museums.

1.はじめに

現在のわが国では、社会の少子高齢化、科学技術の高度化に伴い、急速に生涯学習体系への移行が必要とされ、とりわけ生涯学習と高等教育との密接なかわりが求められている。そのような中で、大学と生涯学習の接点としては、「公開講座」や「社会人大学」などと共に、「大学博物館」が重要な施設として挙げられる。現在、わが国には二百数十余の大学博物館相当施設があると考えられるが¹⁾、これからのわが国にとって、大学博物館が生涯学習に果たす役割は大きいといえよう。

しかし、多くの研究者が指摘するように、これまでの大学博物館の伝統的な機能は、「学術標本の収集・保存・活用の充実」であり、教育普及活動などの側面は比較的軽視されてきた²⁾。こうした状況の背

景としては、大学博物館がわが国に最初に設立されて以来、伝統的に継続してきた学術利用重視の政策が大きく影響を与えていると考える。学術利用のための活動が、学外への教育普及活動に対し常に優先されることが、結果的に大学博物館の閉鎖性を誘発しているのではないだろうか。大学博物館が新たな教育普及活動を展開するためには、大学博物館の伝統的な学術利用重視の姿勢を検証し、なぜそれが大学博物館の閉鎖的体質を生んできたかを確認する必要があると考える。

ところで、わが国における最初の大学博物館は、明治時代にわが国で最初に大学が誕生した直後に設立されたものである。しかしこの施設、すなわち東京大学理学部博物館³⁾は、数年のうちに閉場され、その後継続されることはなかった。この博物館は、設

立に尽力した外国人教員の意向が十分に反映されず、学内と一部の研究者のための施設として運営され、そのために学外公開に消極的だったという経緯がある。「大学博物館は学術利用のための施設である」という考えが、わが国最初の大学博物館においてすでに見られ、それが大学博物館の閉鎖性を生む大きな要因になったと言えよう。したがって、この博物館の活動をみることで、わが国の大学博物館の学術利用重視の姿勢を検証し、それがどのように閉鎖性を生み出すかを明らかにすることが可能と考える。

東京大学理学部博物館に関しては、すでに磯野や西村らの研究⁹⁾があるが、磯野の研究はモースの足跡を辿る過程で、博物館閉場の経緯に言及するものであり、また西村らの研究は、その建築のあり様と公開の実態に関するものである。したがって、この博物館の学術利用重視の姿勢と閉鎖性を具体的に考察した研究はみあたらない。

本研究は、東京大学理学部博物館の事例から、わが国において大学博物館の学術利用重視の姿勢が博物館の閉鎖性をもたらす経緯を検証するものである。また、その検証の際に、この博物館を開設しようとした外国人教員がどのようなビジョンを抱いていたのか、そして、なぜそれが継続されなかったのかという点にも焦点を当てたい。

2. わが国最初の大学博物館の開設と閉鎖

2.1 東京大学理学部博物館の開設

明治10(1877)年、東京開成学校(南校)と東京医学校(東校)が合併し、わが国最初の大学である東京大学が誕生した。この時点で東京大学には、法・理・文・医の4学部が置かれていた。この東京大学誕生の際に、理学部は一つ橋外東側の開成学校時代の校舎を使用するが、その西南隅に「理学部標本室」があった。明治9(1876)年の記録では、当時ここには、動物学標本300種、植物学標本531種が保存されていた⁹⁾。当時、東京大学に動物学・生理学の教師として赴任した米国人エドワード・シルベスター・モース(Edward Sylvester Morse, 1838~1925)は、この標本室を充実した博物館にすることを考えた。そして当時の大学当局もその考えに賛同した。『文部省第六年報 明治十一年』には、「理學部ニ於テ從來

採集セシ所ノ工學採鑛學化學金石學地質學古生物學古物學動植物學等ニ関スル模型及ヒ標品等凡ソニ萬三千余箇アルヲ以テノ博物場ヲ設置セン事ヲ議定セリト雖モ猶ホ未タ起工ニ至ラス」⁹⁾とあり、モースが就任した翌年には博物館の開設が決まったことがわかる。

博物館開設に先立ち、モースは標本室の資料に古器物学標本(考古学標本)を加え、明治12(1879)年6月、ここを「列品室」と称して開室した。『文部省第七年報 明治十二年』には「博物場ノ如キハ本學年中未ダ全ク落成スルニ至ラズト雖モ其列品ノ數己ニ三萬余箇ヲ準備シ」¹⁰⁾とある。モースはその年の9月に日本を去るが、この「列品室」は東京開成学校病舎(旧フルベッキ邸)に移され、明治13(1880)年に「東京大学理学部博物館」と改称され、開設された。『文部省第八年報 明治十三年』には「博物場設置ノ件」として、「明治十三年三月三十一日東京外國語學校敷地内ニ在ル本部金石地質生物學標品陳列場ヲ博物場ト改称シ」⁸⁾とある。そしてこの博物館は明治14(1881)年に上野公園内で開かれた第二回内国勸業博覧会の期間中(3/1~6/30)の日曜に限り、その観覧券を持っているものに見学させた。この期間中の見学者数は、『東京大学第一年報』の「博物場ノ事」に「来觀人合計四百十三名ナリ」¹¹⁾とある。ここにはじめて学外に公開する大学博物館の誕生をみることができる。さらに博覧会の終了後は、引き続き日曜日に限り一般公開した。明治14(1881)年の「理学部博物場規則改正」第6条には、「毎日曜日午前九時ヨリ午後四時マテ無券ニテ有志者ノ来觀ヲ許ス」¹⁰⁾とある。この年の来館者数は一般959名、臨時61名の計1,020名であった¹¹⁾。

2.2 理学部博物館の閉場

明治13(1880)年に開設した「東京大学理学部博物館」は、僅かの年月で活動が停滞し、閉場されてしまう。まず、博物館は明治15(1882)年に増築のため、日曜日の一般観覧を中止する。『東京大学第二年報』には「本場其増築ニ着手セルヲ以テ七月十六日ヨリ以後ハ毎日曜ノ衆庶來觀ヲ禁セリ」¹²⁾とある。さらに一つ橋の本部と3学部が本郷富士見町に移転するのに伴い、明治18(1885)年に博物館は閉場さ

れ、各資料は各学科に分散され、それぞれの学科の管理下におかれるようになる。

明治 33 (1900) 年にパリ万国博覧会出品の為に製作された写真集『東京帝国大学』には、「病理学列品室」「機械工学列品室」「造船学列品室」「採鉱及冶金学列品室」「応用科学列品室」「地質学列品室」「動物学列品室」「獣医学列品室」という各展示室の写真があり、おのおの「Museum」の名称が付けられている¹³⁾。どの写真にも膨大な資料が収蔵・展示されている様子が伺われ、これらの資料の多くを一堂に集めていた理学部博物場は、充実したコレクションを誇っていた。しかし、これらの資料はすぐに各学部の管理下に置かれ、「博物館」としての機能を十分に発揮することはなかった。

理学部博物場は、理学部が明治 18 (1885) 年 9 月に本郷に移転する前の 7 月 21 日に文部省に返還された。『文部省第十三年報 明治十八年』には、「七月二十一日神田一橋通町一番地内理学部舊博物場ヲ（中略）文部省ニ返還ス」¹⁴⁾とある。この時点で博物場は閉場された。

しかし、博物場は、当初は本郷の加賀屋敷内の旧音楽取調所に移転させる計画であった。音楽取調掛が明治 18 (1885) 年 7 月に本郷から上野に移転したからである。理学部の本郷移転に伴う校舎新築に際し、当事の大学学部総理加藤弘之より文部省に宛てた改善増築見積書には、「理学部博物場ハ豫テ音楽取調所ニ於テ望ム趣ナレハ」¹⁵⁾とある。しかし結局、この望みも実現せず、各学科に分散された資料は、そのまま学生と教師の研究材料として活用されるために保管された。そして大正 12 (1923) 年の関東大震災により、多くの資料が焼失した。

3.E.S.モースの考えた大学博物館

3.1 モースと博物館

わが国最初の大学博物館である東京大学理学部博物場の開設に関わった最も重要な人物がエドワード・シルベスター・モースである。モースは 1838 年にアメリカのメイン州ポートランドに生まれた。彼は早くから博物学に興味を抱き、1854 年、16 歳の若さでポートランド博物学会 (The Portland Society of Natural History) に加入し、その後 1859 年にはボ

ストン博物学会 (The Boston Society of Natural History) の正会員になった。彼はハーバード大学で正規学生としてルイ・アガシ教授 (Jean Louis Rodolphe Agassiz, 1807~1873) に学ぶと共に、同大学で「博物館の整理」業務も兼任した¹⁶⁾。その後、セイラム市ピーボディ科学アカデミー (The Peabody Academy of Science) に就職し、1871 年まで同博物館の主事を務めた。彼は 1871 年から 1874 年までボードン大学の教授を務め、その間はハーバード大学講師も兼任している¹⁷⁾。

モースは明治 10 (1877) 年 7 月 12 日より、いわゆる「お雇い外国人」として東京大学に招聘され、動物学教授として明治 10 (1877) 年から約 2 年間日本に滞在した。そして、明治 12 (1879) 年 9 月に帰国し、郷里のセイラム市、ピーボディ科学アカデミーの博物館館長に就任した。その後、明治 15 (1882) 年 6 月に日本陶器収集の為に再度来日し、この時に集められた資料はボストン美術館 (Museum of Fine Arts Boston) に収蔵された。彼は 2 年間の東京大学勤務中に一度帰国 (1877 年 12 月より 5 ヶ月間) し、その間にアメリカで集めた 2,500 冊の書籍類は、東京大学図書館に寄贈されている。このように、モースが東京大学で教鞭をとったのは 2 年間であり、その間の一時帰国を考えると、彼の在日期间は決して長くはなかった。しかし、彼の著書『日本その日その日』(Japan Day by Day) に見られるように、彼はこの短期間に鋭い観察眼で日本文化の記録を行い、動物学者としてのみならず、民族学者としての並々な才能を発揮している。そして、モースのこの民族学への造詣が、彼の博物館への考えに大きな影響を与えていると考えられる。

モースは、常に博物館と関わりのあった人物であった。彼は在日中、何度も上野の教育博物館や工芸博物館に足を運んでおり、モースが東京大学動物学教授に任命された日に遡りそこから 2 年間、教育博物館の嘱託も務めている¹⁸⁾。『日本その日その日』の 9 月 11 日の日記には、「(教育) 博物館は大きな立派な二階建てで、翼があり、階下の広間の一つは大きな図書館になっている。(中略) 我々の持つ教育制度を踏襲した日本人が、その仕事で使用される道具類を見せる博物館を建てるとは、何という聡明な思いつ

きであろう」¹⁹⁾とある。この文章からも、モースは、たんに動物学教授としての視野からだけでなく、自国の民具や文化財を収集した民族資料の重要性に開眼していたことがわかる。

彼は日本に出発する前の1867年、郷里のピーボディ博物館の創立に当たり、その展示の実施設計を担当し、特許も取得している²⁰⁾。東京大学での勤務を終えたモースは、この博物館の三代目の館長として就任するが、彼が行った仕事は、それまで自然史と博物学の博物館でしかなかったこの博物館を、民族学を含めた総合的な博物館に作り変えることであった。その結果、1881年にモースが記した館長業務報告では、展示場の半分のスペースが民族学資料のために当てられ、展示は国別に振り分けられている。そして、現在この博物館は海事史、民族学、博物学（自然史）の3部門からなる総合博物館に成長している²¹⁾。このようにモースにおける博物館とは、狭義な分野に特定された専門博物館ではなく、複数の分野にまたがる総合的な博物館であった。そしてこうした構想が在日中のモースが描いた東京大学におけるわが国最初の大学博物館にすでに見られるのである。

3.2 モースの構想した大学博物館

モースの『日本その日その日』には、モースが将来この大学に作ろうと考えた博物館の構想を綴った日記がある。そこには「図254は、大学に於ける動物学実験室の大略を写生したもので、私の特別学生達はここで勉強する。(中略)1とした部屋は二階にある私の講義室で、その下に当たる長さ二倍の広間は、私が博物館として将来使用しようとするものである」²²⁾と書かれている。この日記は、モースが初めて来日して間もない頃のもので、モースはこのように明治10(1877)年に赴任した時点で、すでに大学内に博物館を作る構想を持っていた。『東京大学法理文三学部第六年報』の「モース氏申報」で、モースは明治10(1877)年9月から明治12(1879)年8月までの職務の報告を行っているが、その中にも「余レ職ヲ本部ニ執ルヤ其初ニ於テ既ニ生物学上列品場ヲ創立スルノ極メテ切要ナルコトヲ思考シタリ」²³⁾とあり、東京大学の職に就くと共にすぐに博物館創

設の必要を感じていたことが記されている。

東京大学誕生時の理学部標本室には、前述のとおり、動物学標本と植物学標本だけが所蔵されていた。モースは、この資料にさらに古器物学標本（考古学資料）を加えたのであった。モースが去った後に刊行されている『文部省第八年報 明治十三年』には、理学部列品室には、動物学標本6,107点、植物学標本6,795点、古器物学標本1,194点の膨大なコレクションが所蔵されていたと記録されている²⁴⁾。モースは、この列品室を自分の専門である動植物学標本と、のちに彼が発掘する有名な大森貝塚に代表される貝塚出土品のためだけに使おうとは考えなかった。モースは、古器物学標本や鉱物学標本、そして化石なども含めたもっと規模の大きく、そして建物も独立した博物館の設立構想を持っていたのである。そして、そのような博物館の必要性を当事の大学学部総理加藤弘之に進言している²⁵⁾。この進言をうけ、大学当局は明治12(1879)年、東京開成学校病舎（旧フルベッキ邸）を博物場として割り当て同年6月から修繕・改築を行った²⁶⁾。その結果、東京大学理学部博物場は明治13(1880)年3月に開設した。モースが帰国したのが明治12(1879)年9月であり、彼は念願の博物館の完成を見ずに帰国したが、帰国間際までその設計に携わり、後に増築される二階建て部分の設計図も引いていた²⁷⁾。

さらにモースは、この列品室を学内利用だけでなく、一般の人々にも公開することを考えていたと思われる。前述の「モース氏申報」の中で、モースは「専門生徒松浦、佐々木ノ二氏ハ列品永久展覧ノ事業ニ於テ余ヲ帮助シ」と報告しており、列品室を恒久的に公開することを予定していた。『東京大学百年史 部局Ⅱ』には、「初代の教授として、モースのような、驚くべき好奇心を我が国のすべての事物に示した博物学者で、しかも大学内だけでなく、一般の人々に対する動物学の普及にも熱意を持った人物を得たことは、当時として幸いなことであった」²⁸⁾とある。このようにモースは、総合的で、なおかつ一般にも公開する大学博物館の開設を目指していた。わが国最初の大学博物館は、モースという博物館に造詣の深い指導者のもとで、欧米に匹敵する大学博物館としての成長を遂げることのできる環境にあっ

た。しかし、モースの帰国後開設された東京大学理学部博物場は、あくまでも学内と研究者のための施設という姿勢を貫いたのである。

4. 理学部博物場の活動

4.1 収集活動

東京大学理学部博物場は短い活動期間でありながら、収集活動には大きな変化が見られた。モースが赴任する直前の明治 10 (1877) 年から、正確な記録が残されている最後の年の明治 16 (1883) 年までの資料総数の推移を見てみると、明治 10 年 1,782 点、明治 11 年 8,948 点、明治 12 年 14,096 点、明治 14 年 14,705 点、明治 15 年 15,236 点、明治 16 年 16,688 点となる²⁹⁾。このようにモースが赴任した明治 10

(1877) 年から明治 12 (1879) 年までの 2 年間で資料数は 12,314 点も増加しているのに対し、その後 4 年間の増加数は 2,592 点に過ぎない。このような資料収集の停滞要因については、まず、モースの動物学教授職の後任となった米国人ホイットマン (Charles Otis Whitman, 1842~1910) が収集にあまり熱心でなかった点が挙げられる。『東京帝国大学五十年史』には「八月三十一日を以て教授モールス夫々解任せらる。而して新規招聘に関しては、八月二十四日を以て米国人チャーレス・ホイットマンが動物学及生理学教授として就職したることなりとす」³⁰⁾とある。ホイットマンは明治 12 (1879) 年より明治 14 (1881) 年までの 2 年間、東京大学に奉職したが、彼は同じ動物学でもモースとは異なる研究方法を得意とする学者であった。『東京大学百年史 部局史 II』には、「(モース教授は) 室内での講義よりも各地での標本の採集と、野外観察に力を注いだ」「(ホイットマン教授は) ある意味ではモース教授とは対蹠的な存在で、(中略) 野外の動物学より実験室的な動物学を中心とし、当時欧米で盛んになりはじめた顕微鏡切片の作製法などといったミクロな実験技術を教授した」³¹⁾とある。磯野はこの点について「後任のホイットマンが収集に力を入れなかったことが歴然としている」³²⁾と述べているが、このような研究方法の違いが、所蔵数増加の停滞になった。

また、新たに明治 15 (1882) 年に博物場管理者に任命された久原躬弦は、当事の博物場の所蔵分野と

は異なる化学の専門であった。したがって、モースのように自らの発掘資料を積極的に博物館に納めることは困難である。久原の行った業務は、モースの集めた膨大な資料を整理することであった。

4.2 整理業務

明治 15 (1882) 年 4 月から小石川植物園事務掛取締と兼務で博物場取締に任命された久原躬弦は、それからの業務を主に所蔵資料の整理と目録の作成に振り当て、博物場の日曜日の一般観覧を中止した。

『文部省第十年報 明治 15 年』には「本場其増築ニ着手セルヲ以テ七月十六日ヨリ以後ハ毎日曜日ノ来庶来観ヲ禁セリ」³³⁾とあり、博物場は増築のために日曜の公開を取りやめた。

久原はもちろん博物場責任者としての任務を怠ったわけではない。それどころか、モースがピーボディ博物館長として明治 15 (1882) 年に 3 度目の来日をした際に、ピーボディ科学アカデミィから博物場に珊瑚のコレクションが贈られたが、その格納と整理作業に、久原と種田織三がすべての補助をしたと、モースはピーボディ科学アカデミィ理事長あての「館長報告」で述べている³⁴⁾。このように、久原は博物場の任務を積極的にこなした。しかし、彼は博物場の膨大な資料の整理と目録作成に多くの時間を費やし、その結果、資料の収集や公開といった他の博物館活動が停滞してしまったのである。

『東京大学第二年報』の「理學部博物場取締久原躬弦申報」では、明治 14 (1881) 年 9 月から明治 15 (1882) 年 8 月の業務報告として、「本場諸品ノ分類整頓ハ其成ヲ本學年二期セント雖モ草創日尚浅ク加フルニ本課兼勤諸教員ノ教場本務ノ繁劇ナルカ為メニ充分ノ調査鑑定ヲ為スニ遑ナク」³⁵⁾とあり、この年度に博物場の資料の整理を行なうつもりであったが、博物場の兼務教員が本業に追われ、博物場の仕事にまで手が回らなかったことが記述されている。

また『東京大学第四年報』の「理學部博物場監督久原躬弦申報」では、「明治十七年一月ヨリ同十二月ニ至ルー暦年間乃携処報ノ要ヲ挙レハ…」と始まり古生物学標品の分類を改正し目録を編集し、さらには既刊の地質学目録を推敲し岩石学目録を印刷、工学部の模型雛形類を調査し目録を印刷云々とあり、

幅広い分野の資料を整理し目録を作成することに一年間を割いていることが記載されている³⁶⁾。さらに同じ第五年報では、「明治十八年一月ヨリ全十二月ニ至ル一曆年中ハ移動ノ為メ錯雑シタル諸標品ノ分類列次ニ多クノ時日ヲ費シ為メニ申報スヘキ事業少ナレト」³⁷⁾と述べ、将来の学部に移転に伴い、博物館も移転されるため、その準備のために資料の整理に追われている様子を述べている。

このように管理者が替わることによって、当初の活動に大きな変更がもたらされた要因としては、この博物館が長期的な活動のビジョンを確立せずに開場されたことを物語っている。

4.3 公開活動

東京大学理学部博物館は、独立した建物の施設として、早くから学外公開も視野に入れて開設が進められた。しかし、この学外公開は、あくまでも学外の研究者を対象にしたもので、決して地域住民に開放するものではなかった。『文部省第八年報 明治十三年』には、「博物館設置ノ件」として、「標品陳列場ヲ博物館ト改称シ（中略）諸陳列品ノ整頓スルヲ待チ毎月数回ヲ期シテ有志者ノ縦覧ヲ許サントスルニ在リ」³⁸⁾とあり、開館当初から限られた範囲で学外の「有志者」への公開を考えていたことがわかる。また明治14（1881）年に改定された博物館規則の第1条では、「本場ノ陳列室ハ理学部各科教員ノ授業用乃該科学生ノ参観ニ供ス」³⁹⁾と博物館の目的が「学内利用である」ことが明記されている。このように、わが国最初の大学博物館は、開設当初から、学内利用を第一の目的とする施設と考えられ、学外開放は、あくまでも研究者の研究目的のために限るという姿勢を持っていた。

博物館は明治14（1881）年から博覧開会最中に毎日曜日に一般公開に踏み切った。しかし、この公開は、博物館の将来的な学外開放計画の一環として行ったのではなく、文部省から要請を受け、東京大学全体を観覧する企画の一部として催されたものである。『東京大学第一年報』には、「明治十四年三月一日ヨリ六月三十日ニ至ル四ヶ月間法理分學部ニ於テハ毎日曜日午前九時ヨリ午後四時マテ人員百名ヲ限り其図書館、博物館、器械場ヲ醫學部ニ於テハ休

日ヲ除キ毎日正午十二時ヨリ午後四時マテ十名ヲ限り其各教場及医院ヲ縦覧セシム是レ第二回内国勸業博覧会開場中ヲ期シ有志者ノ望ヲ満タシメンカ為メナリ」⁴⁰⁾とある。このように、この公開は博物館、図書館、器械場を含めた公開であり、さらに休日以外の平日において医学部の教場や医院も公開している。したがって、博覧会期間中の公開は、博物館の学外公開と考えるよりも、東京大学をいわば「オープンキャンパス」として、学外者が見学できるように開放した催しの一環として、博物館も開放したと考えるほうが妥当である。

また、博覧会終了後も日曜日のみを公開日にしたことも、決して一般博物館のように、公衆の利用の利便を図ったものではなかった。この点について西村らは、縦覧者は一般ではなく地方の教育有志者を想定していたこと、公開は彼らの授業の支障にならないことが前提であったことを指摘している⁴¹⁾。日曜のみの公開は、あくまで地方の教育者、すなわち有志者に配慮したためであった。

また、博物館は、もともと一般庶民に公開する施設ではないことに存在意義を見出し、一般博物館との差別化を行っている。西村らの研究によれば、博物館は宣伝をしても見学者が少なかったことについて、その見学者が有志者、すなわち専門の研究者であり、一般の博物館の来館者とは異なることを強調し、自ら評価している⁴²⁾。「大学博物館は一般博物館とは異なる」という考えが、最初の大学博物館からすでに見られるのである。

4.4 学術利用重視がもたらす閉鎖性

東京大学理学部博物館は、この学術利用重視の姿勢をさらに強めていく。博物館の見学には、事前の許可が必要になった。博物館は明治15年に日曜の公開を中止した後は、特別な研究者にのみ許可制で閲覧を許している。『文部省第十一年報 明治十六年』には、「来館人ハ特志ノ旨申出タル者ニ限り協議ノ上縦覧ヲ許ス」⁴³⁾とある。博覧会開催中に「オープンキャンパス」の一環で公開した時期は、一般庶民にも公開する雰囲気があった。しかし、その後の日曜のみの開館は研究者を対象としたものであり、さらにその後の研究者のみ事前の許可により閲覧を許す

姿勢からは、完全に研究者を対象とする博物館になってしまったことがわかる。

その結果、必然的に見学者数は激減した。『東京大学第二年報』では、明治 14 (1881) 年 9 月から明治 15 (1882) 年 8 月の間の見学者数が通常来館者 1,698 名、臨時来館者 43 名の計 1,741 名であり、この学年中は 43 回の通常開館日以外にも博物館を開けていたことがわかる⁴⁴⁾。しかし、『文部省第十一年報 明治十六年』によれば、明治 15 (1882) 年 9 月から明治 16 年 (1883) 12 月までの来館者は 15 名に過ぎない⁴⁵⁾。

博覧会期間の開館のように、博物館は初期の段階では比較的外部への公開に協力的であったが、次第に学術利用限定の姿勢を強め、事前の許可なく見学できないように閉鎖的になっていった。その結果、必然的に見学者数は激減した。このように学術利用重視の姿勢が閉鎖的体質を築き上げているのがわかる。そしてその背景には、当時の「大学」の存在意義自体が影響を与えていると考えられる。すなわち、当時の大学とは、国家の将来をリードするエリート養成のための機関であった。したがって大学博物館も、そのようなエリートのための施設であり、またそれを活用できる外部の高レベルな研究者のための施設であった。この点に関しては、機会を改めて論じたいと思う。モースは前述の『東京大学百年史 部局Ⅱ』にあるように、大学の学問を広く社会にも伝えようと考えていた。モースは大学博物館を研究機関であると共に地域に開かれた施設であると考えていた。しかし、当時のわが国の大学人の「大学博物館は学内研究機関である」という考えが、わが国最初の大学博物館を閉鎖的にしたものと考えられる。

5. おわりに

以上、わが国最初の大学博物館を分析することで、大学博物館の閉鎖的体質の要因を考察した。わが国最初の大学博物館、すなわち東京大学理学部博物館は、この設立に尽力した外国人教授モースにより、社会に開かれた総合博物館として開設の準備がなされた。しかし、モースの帰国後に開設したこの博物館は、十分な博物館活動を行なうことなく、わずかな年月で閉場されてしまった。

東京大学理学部博物館は、管理者の交代により、収集活動や整理活動に大きな変化が見られた。そして、この博物館は開設当初から一般の見学者への公開にはあまり関心を示さなかった。この姿勢は年ごとにますます強まり、閉場間際には事前の許可を受けた研究者しか見学できなくなった。結果的には、博物館は閉鎖的体質を次第に確立していくことになる。この博物館が学外公開に消極的であった背景には、この博物館が、開設された当初から、学内と研究者のための施設と考えられていたことが大きな要因と考える。学術利用重視の姿勢が、公開活動の足かせとなり閉鎖的体質を生んでいった。このように「大学博物館は学術利用のための施設である」という考えが、わが国最初の大学博物館からすでに見られ、それが大学博物館の閉鎖性を生んでいるのである。

【注】

- 1) 大学博物館の数は調査によりまちまちであるが、(株)展示学研究所の調査によれば約 250 館を数えることができると報告されている。(展示学研究所編『日本の大学博物館』トータルメディア開発研究所 2001 「はじめに」)
- 2) 大学博物館の教育普及活動は、館によりその活動の差が大きい。緒方の調査によれば、アンケートに回答のあった館の 34% が教育普及活動を特にしていない。(緒方泉編『日本ユニバーシティ・ミュージアム総覧』昭和堂 2007 p.431)
- 3) わが国最初の大学博物館については、「東京大学大学院理学系研究科附属植物園」通称「小石川植物園」をその施設に挙げる研究もあるが、小石川植物園は江戸幕府が開園した「小石川御薬園」を東京大学が設立時にそのまま受け継ぎ公開した施設である。大学博物館については、文部省学術審議会学術資料部会が平成 8 (1996) 年に提出した中間報告『ユニバーシティ・ミュージアムの設置について』の中に、「二 ユニバーシティ・ミュージアムの機能」として、「大学において収集・生成された有形の学術標本を整理、保存し、公開・展示し、その情報を提供する」とある。この「大学において収集・生成された学術標本」を取り扱

- うという視点から、本研究では東京大学理学部博物館を最初の例とした。
- 4) 磯野直秀 「日本におけるモースの足跡」 『モースと日本』 小学館 1988・西村公宏ほか 「東京大学理学部博物館の建築と公開について」 『日本建築学会計画系論文集』 日本建築学会 2006
 - 5) 前出 「日本におけるモースの足跡」 1988 p.86
 - 6) 『文部省第六年報 明治十一年』 1878 pp.10～11
 - 7) 『文部省第七年報 明治十二年』 1879 p.10
 - 8) 『文部省第八年報 明治十三年』 1880 p.450
 - 9) 『東京大学第一年報』 1881 p.283
 - 10) 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史』 資料2 東京大学 1985 p.671
 - 11) 前出 「東京大学理学部博物館の建築と公開について」 2006 p.188
 - 12) 『東京大学第二年報』 1882 p.257
 - 13) 小川一眞 『写真集 東京帝国大学』 小川写真製版所 1900
 - 14) 『文部省第十三年報 明治十八年』 1885 p.438
 - 15) 「東京帝国大学五十年史 上下」 東京帝国大 1932 p.539
 - 16) 園田英弘 「ニューイングランドにおけるモースの知的環境」 前出『モースと日本』 1988 pp.444～456
 - 17) 藤川玄人 「解説」 E.S.モース著 石川欣一訳 『日本その日その日1』 平凡社 1970 p.248
 - 18) 椎名仙卓 『モースの発掘』 恒和出版 1988 pp.85～86
 - 19) E.S.モース著 石川欣一訳 『日本その日その日2』 平凡社 1970 p.3
 - 20) 守屋毅 「モースとその日本研究」 前出『モースと日本』 1988 p.153
 - 21) 守屋毅 「モース・コレクションの形成」 前出『モースと日本』 1988 p.355
 - 22) 前出 『日本その日その日2』 1970 p.39
 - 23) 「資料」 前出『モースと日本』 1988 p.495
 - 24) 前出 『文部省第八年報 明治十三年』 1880 p.467
 - 25) 西野嘉章ほか 『これは凄い東京大学コレクション』 新潮社 1998 p.119
 - 26) 前出 『東京大学第二年報』 1882 p.257
 - 26) 前出 「東京大学理学部博物館の建築と公開について」 2006 p.183
 - 27) E.S.モース著 石川欣一訳 『日本その日その日3』 平凡社 1971 p.43
 - 28) 前出 『東京大学百年史』 部局Ⅱ 1987 p.495
 - 29) 前出 「日本におけるモースの足跡」 1988 p.86
 - 30) 前出 『東京帝国大学五十年史』 1932 p.679
 - 31) 前出 『東京大学百年史』 部局Ⅱ 1987 pp.494～495
 - 32) 前出 「日本におけるモースの足跡」 1988 p.86
 - 33) 『文部省第十年報 明治十五年』 1882 p.845
 - 34) 前出 「モースとその日本研究」 1988 p.148
 - 35) 前出 『東京大学第二年報』 1882 p.257
 - 36) 『東京大学第四年報』 1884 p.407
 - 37) 『東京大学第五年報』 1885 p.467
 - 38) 前出 『文部省第八年報 明治十三年』 1880 p.450
 - 39) 前出『東京大学百年史百年史』 資料2 1985 p.671
 - 40) 前出 『東京大学第一年報』 1881 p.46
 - 41) 前出 「東京大学理学部博物館の建築と公開について」 2006 p.187
 - 42) 前出 「東京大学理学部博物館の建築と公開について」 2006 pp.187～188
 - 43) 『文部省第十一年報 明治十六年』 1883 p.846
 - 44) 前出 『東京大学第二年報』 1882 p.257
 - 45) 前出 『文部省第十一年報 明治十六年』 1883 p.846

(Received: May 31, 2009)

(Issued in internet Edition: July 1, 2009)